「海外・帰国児童生徒教育」の一考察
―― 第二次世界大戦下の（帰国子女学級）東洋英和女学院「別科」の事例 ――

原　和子

I　はじめに

海外在留の日本人が最も心を痛めているのは，入試の現状も含め，帰国後の子供の教育問題である。海外での異文化体験をへて，日本の学校社会へ帰って来る帰国児童生徒は年々ふえ，昭和61年は１万人にも及んでいる。

帰国児童生徒の急増に伴い，その受け入れ教育の困難さが多くの問題を，日本の社会に，教育界に投げかけている。対応をせまられた文部省は，受け入れ体制の拡充及び制度の改善をはかり，ここ数年少からず進展が見られた。国立大附属学校をはじめ，「受入れ校」，「受入れ学級」や「受入れ推進地域」が国レベル，自治体レベルで多くつくられ，実践研究もさかんになっている。しかし，制度及び実践上の課題は益々ふえて，帰国児童・生徒の教育は日本の教育に対する鋭い問題提起となっている。

1934（昭和９）年，東洋英和女学院に「別科（スペシャルクラス）」は設置された。そして，これは第二次世界大戦の激化する1944（昭和19）年まで在置された。帰国生徒やカナダ・アメリカなどの二世たちのための「受入れ学級」であった。現在の「受入れ学級」制度を新しい視点から見直し，帰国児童・生徒教育への考察を促すために，過去におけるユニークな教育実践の事例として，この受入れ学級「別科」の調査を試みた。調査は未だ第一ステップにあり，今回は，その中間報告である。

この研究は，「別科」の教育について一方で，その設置の状況，内容(システム)，実践された授業等について，別科担当教師秋山はるの談話（下記「史

料室だより」No.14に記載，1981)[1]を基軸に，学校及び教師の視点から調査し，他方，第二次大戦前後に「別科」に在学した，当時の「帰国子女」である別科生の視点から，別科・女学科での学校生活について，授業の形態，クラスの雰囲気，学校環境への適応過程等その実態を，インタビュー調査によりさぐることを目的としている。

II 方 法

1. 資料調査

東洋英和女学院資料のうち，東洋英和女学院史料室委員会発行「史料室だより，No.14」（別科－海外帰国子女の教育，『秋山はる先生の話』，1981)[1]を中心にし乍ら，東洋英和女学院70年誌（1954)[2]，同100年史（1984)[3]等により，「別科」の教育実践について，組織，内容，授業等を調査した。

2. インタビュー調査

はじめ，調査対象者として考えた半世紀前の，もと別科生の名簿を入手することがきわめて困難であった。のちに，最初の２名の住所・電話を知り，この２名に対して，面接及び電話でインタビューを実施した。非常に協力的で，約２時間の面接と１時間半の電話インタビューに応じてくれた。そればかりでなく，他の４名の住所・電話，後には35名（内，在米・不明者13名を含む）の名簿の入手に協力が得られた。今回のデータは，上記の２名の他に，１時間～１時間半の電話インタビューに快よく応じてくれた４名を加え，６名の調査対象者のデータである。

(1) **調査の実施時期**：1989年10月

(2) **調査対象者**：1937（昭和12）年より1942（昭和17）年までの期間に，東洋英和女学院別科に在学した帰国生徒のうち６名。

年齢：61歳～65歳　平均62.8歳

性：全員女性

在住国：英・米・豪・シンガポールの４か国（すべて英語圏）６名。中国

（上海）１名。

海外滞在回数：１回～３回。平均1.7回。

滞在年数：４年～11年７カ月。平均７年10カ月。10年以上３名。

海外での学校：現地校５名。インターナショナルスクール１名。日本人学校２名（於 上海，シンガポール）。

帰国時年齢：13歳以上２名（グループⅠ），12歳以下４名（グループⅡ）。帰国直後「別科」に入学しているため，帰国時年齢と別科入学年齢は一致する。

(3) 調査項目

次の調査項目でインタビューを行なった。１）～４）については答えてもらい，５）～７）については自由に話してもらった。

１）海外在住暦

①渡航した時の年齢　②滞在年数　③国名（場所）　④学校

２）家庭状況　①父親の職業　②家族状況

３）①帰国年齢（対応学年）

②帰国の理由，帰国時の状況

４）①別科入学時の年齢

②別科在学中の年数

③女学科に編入又は入学した学年

④編入学年は年齢相当の学年か。または何年下か。

５）帰国後の学校生活について

①別科時代

ａ．学業面　ｂ．生活環境面

②女学科での適応

ａ．学業面　ｂ．生活環境面

６）言語について

①海外在留時の日本語の修得。

②英語の修得と維持。

7）異文化体験（自文化復帰体験を含めて）の影響（性格やその後の生き方など）をどう捉えているか。

Ⅲ　結　果

1.　「別科」の教育実践について（保存資料及びインタビュー調査結果の一部より）

(1)　「別科」の設置

1）当時の学校の状況

東洋英和女学院は，カナダメソジスト教会婦人伝道会社より派遣された婦人宣教師M．J．カートメルにより1884（明治17）年に，開校された女子のキリスト教主義学校である。

1933（昭和８）年には創立50周年を迎えて，鉄筋コンクリート五階建の新校舎が落成，前年落成した寄宿舎（100人収容）とともに校舎の整備が整えられた。当時の校長F．G．ハミルトンは人や組織をよく用い，優れた指導力を発揮した[3]。この時，学校は名実ともに充実していたと思われる[3]。

2）父兄の要望

当時，海外に長く駐在した外交官，商社員らの帰国に際して，その子らの教育を託したい，また，外国に永住していた日本人が，その二世の教育を母国日本で受けさせたいとの要望が強かった。

3）「別科」設置の状況

当時の校長ハミルトンは，父兄の要望に答えて，「他校に見られない一つの組織，スペシアルクラス，即ち別科」[2]をつくった。秋山によれば「別科ができて２，３年後に早稲田に国際学院が出来た。これが別科みたいに外国帰りの二世，或は小さい時から外国で過した人達を集めていました。それから恵泉（女学校）にできました。恵泉の先生が私のクラスに参観にいらしてお作りになりましてね。」[1]当時，英和に続いて各校が父兄の要望に答えて「受入れ学級」が設置された様子がうかがえる。

4）有能な「別科」担当教師秋山ハル

校長のハミルトンは「小学生から始めなくては」[1]と小学科内に「別科」の設置を定めた。そして，秋山はるを，その主任に任命した。秋山は，東洋英和の女学校・高等科（英語専攻）の卒業生で，英語の巧みな小学科教師であった。当時秋山は小学校在職15年のベテラン教師で，バイリンガル（bilingual）教育が出来るのは秋山しかないという，ハミルトンの信任に対して，いささかの自信もあり，それに応えて，1934（昭和９）年から「別科」を担当し，太平洋戦争開戦後，1942（昭和17）年６月から1944（昭和19）年３月までのハミルトン帰国後も「別科」の教育に専念した。「日本語を教えるのに（引用者注・生徒は）英語で答えるんですよ。英語のできない人では教えられません。私は勿論，日本語。向うは英語ですね。夏休みなんか手紙をよこしても，＜先生，英語ですぐ返事くれ＞って云う。返事は英語で書かなくてはなりません」[1]と秋山はそのバイリンガル教育について語っている。

(2) 別科の内容（システム）

１）不定年齢層の生徒

開校時の生徒達の年齢は７，８歳（後には10歳）から18歳位迄，かなり幅があった。これはハワイの日系二世等，ハイスクールを出ていても，日本語ができない人達も加えていたので，子供から大人に近い者までが一つのクラスにいる，という特異な学級であった。「別科について，1932（昭和７）年４月，小学科に入学した原村静子は次のように書いている。

＜別科－小２の頃，大きな，パーマをかけた生徒もいるクラスが出来た。受持が秋山先生で，英語がペラペラ，国語に弱い二世の別科だった。ふきちゃんという，いたずらっ子がいて，電車の中でビスケットを食べ，私達をびっくりさせた＞（「東洋英和小学科入学」手稿『小学科の記録』）」[3]

２）別科は小学科に設置

別科は小学科におかれ，礼拝，遠足，修学旅行等の学校行事を小学生とともにした。別科生はＡクラスの国語を除いては，小学科の勉強をしていたし，秋山は小学科の教師であったので，その方が好都合であった。また，小学科

では，別科生への風当りも少なかったことと考えられる。

3）「別科」への受入れ制度

別科生への受入れは，随時受入れ。推薦者が必要であったが，学力も問われず，「別科に入る時，『東京』と書いてごらんなさい。と言われ『京』の字しか書けませんでした」（昭和14年入学の別科生Ｂさん）と言っているが，その程度であった。日本語（国語）を主としながらも，劣っている特定学科があれば，それにも力をそそぎ，Ａ（女学生レベル）とＢ（小学生レベル）の能力別クラス指導，更に，夫々の学力に応じた個別指導が行われた。

4）進級・編入の仕組み

「別科で１年から３年位在学した後，個々の学力の向上を待って，それに応じた年齢相当の学年，小学５年，６年に，または女学科１年（引用者注：現制度中学１年相当）から４年（高校１年に相当）に編入させる仕組み」[2]になっており，別科を終えて後，どの学年へ進級，編入するかの決定権は，すべて秋山に任されていた。秋山は次のように語っている。

「決めるのはね，知能，健康，それからその子の努力，年齢の四つの点（を考える。）（中略）一人一人，四つの点で，凡その方向をきめるのです。そして，その方向で私が努力する。生徒にも努力させる。そうすると子どももその気になって一生懸命やる。私が女学科に入れた生徒は大低成績がいいんですよ」[1]

5）別科生徒数，出身国・滞在国

「1934（昭和９）年４月開校時は15人，５月には20人にふえた。定員20名とし乍らも，別科生徒数はかなり流動的で，最大35名迄受入れた」[1]「４月の在籍数は，昭和10年26名，11年27名，12年20名，13年22名，14年29名，15年26名，16年31名，17年23名，18年16名（４月の在籍者『理事会記録』『教員会議録』『教務日誌』より作成」[1] 1939（昭和14）年，第二次世界大戦勃発から1941（昭和16）年迄，帰国生徒がふえ，開戦後はへっている。別科開校中の10年間に「入学した生徒数は（総計）185名になっている。その中，外国人７名,(満州５名，オランダ１名，タイ１名)」[1]であった。

滞在国・出身国は，「シンガポール，オーストラリア，インド，タイ，アフリカ，フランス，オーストリヤ，ドイツ，英国，ハワイ，アメリカ，カナダ等」[1]広く欧米やアジア・アフリカに分布していた。

6）別科の月謝について

「当時の大学以上の月謝」[1]で「英和の月謝は，３ケ月45円でした。」（昭和12年別科入学のＥさんの話）

(3) 別科での授業

秋山は，国語，習字，お話の時間，ハミルトン帰国後は聖書をも教え，算数，体育，社会，図工は樫村小学科長他が担当した。「家庭，音楽はなかった。」（別科生Ｄさんの話）

1）国語の授業

「普通は週５時間なのを，別科では11時間も教えた。」[1]英和は土曜休みの五日制，１日に２時間は国語があったことになる。授業は，始めは全員がＢクラスで小学科レベルだが，小学校の国定教科書12巻の学習が終るとＡクラス（女学科レベル）に進む。Ａクラスは女学科の国語の教師が担当し，女学科１年，２年程度の授業をする。Ｂクラスは，小学科生の制服と同じで襟の金色の線が１本，Ａクラスは女学科と同じ２本線の制服になる。Ｂクラスは，さらに２人から３人ずつ，教科書の程度に応じてわけ，複式授業の形態で授業が行われた。国定教科書の２の巻から始めて１冊あげる毎にテストを受け，合格すると上の巻へ進む。一人一人が自分のペースで進む個人指導が行われた。

2）「お話の時間」と「ライブラリーの時間」

「お話の時間」はアメリカの小学校の「ショー・アンド・テル」と似ているが，秋山独特の時間で，日本語か英語の本を読み，その内容を日本語で話す。皆が聴いて批評する時間である。また「ライブラリーの時間」は，当時，英和ではどのクラスにもおかれていたが，これは生徒が図書室で本を読む時間である。その時間には，別科生は日本語の本を読むように指導された。

3）聖書の時間

「ミス・ハミルトンやミス・キニーの聖書の時間，『別科』を教える時の先生達はリラックスしていらっしゃる様でした。」（別科生のＦさんの話）英語で行われたこの授業は，別科生にとっても，いきいきと楽しい時間であったと思われる。

4）日本文化や日本のよさを知らせる努力

別科生は小学科とともに修学旅行で京都，奈良，箱根，日光に行き，また週に１回位，校外にも見学に行っている。秋山は「アメリカで育った子は日本よりアメリカの方がいいと，日本を低く見る。日本の国旗を見ても，何も感じないが，アメリカの国旗を見ると，何となく懐しいと感じる。」[1] つまり，日本人なのに日本人としての自覚がないのは，かわいそうだというので「日本のいい所を見せ，自分の国はいい国だと思うように」[1] 修学旅行や見学に熱心であったのである。

5）秋山はるの感慨

秋山はるは「別科」を教える前は「（引用者注：別科を引きうけるのは）実際いやだったの。外国帰りの子供は無作法で，乱暴で，手に負えない所があるんです。」[1] と云って，別科担当を断っている。しかし別科を教えて後には，「やってみて良かったと思いました。私の気持にぴったり。（私の）性質にあってました。別科の子どもは，嘘，偽りがないの。（中略）日本の子どもは，この先生嫌いと思ってもね。先生の前で，嫌いだなんて云いません。＜あなたは今，私の方を向いて話をきいているような顔をしているけれど，他の事を考えていますね。＞って私が言うと，日本の子なら＜いいえ＞というかも知れないけれど，向うの子は＜はい，他の事を考えています。＞ってちゃんと言うの。それがすごく気に入っています。（中略）暴れん坊のところもありますけれど，（私は）すごく楽しんでやりました。」[1]

帰国生徒に対する偏った見方，これは秋山だけでなく，昭和８年当時の教師達の一般的なものと思われる。礼儀作法がやかましかった当時，日本風の行儀とは異う，帰国した子供達の行動がどう受取められていたか，乱暴で無作法，とだけ見ていたらしいことがうかがわれる。しかし秋山は別科での10

年間の生徒とのコミュニケーションの結果，帰国の子供達の陰日向のない率直さ，正直さがすっかり気に入り，始めは乱暴と見た欠点も，快活な積極性とわかり，教師側の視点が大きく変わったことがわかる。

2. インタビュー調査結果と考察

この調査は，前項の資料調査が，学校側，教師側の視点から別科の教育を見たのに対して，別科生の視点から，別科での学校生活を知る目的で，学業の回復，生活環境への適応過程，戦時態勢下に入りつつあった当時の別科生へのプレッシャー等を，６人の調査対象者にふりかえってもらったものである。

(1) 調査対象者のプロフィル

１）海外在住歴の概略を表１にまとめた。

２）日本の小学校（日本人小学校も含む）への通学。別科入学以前の日本語学習歴。

Ａさんは７～10歳までの帰国時に東洋英和小学科に編入，小１から小４まで在学。Ｂさんは上海日本人小学校（小１）の途中で帰国，公立小学校に編入，小２終了で渡米。Ｄさんはシンガポールで日本人小学校に入学，小３の一学期まで在学。ここで始めて，日本語を習ったという。Ｅさんは８歳（小２）まで日本の小学校。Ｃ，Ｆさんは日本の小学校に通っていない。

３）海外在住の理由・父の職業・家族状況

海外在住の理由は，全員父の転勤。父の職業は，商社員４名，銀行員２名である。家族は，Ｃ，Ｄ，Ｅさん３人がひとりっ子，Ｂさんは，兄がいるが日本に残っていたので海外生活では独り，Ａさんは，11歳下の妹が二度目の渡航時に誕生。Ｆさんだけが１歳下の妹がいる。

４）帰国の状況・理由

Ｅさん，Ｆさんは父の転勤で1937（昭和12）年に帰国。Ｃさん，Ｄさんは1939（昭和14）年10月，第二次世界大戦の勃発で，引揚船で帰国した。Ｄさんは，英国生れでこの時始めて日本に帰った。Ｂさんも同じ年の９月に米国

表 1. 海外在留歴の概略

被検者	滞　在　国	当時の年齢（学年 学校）	滞在年数
A	①米　国 （ニューヨーク） ②米　国 （ニューヨーク）	3－7歳（幼－小1） 現地小学校 10－16歳（小4－高1） ハイスクール	4年 6年 計10年
B	①中　国（上海） ②米　国 （サンフランシスコ）	5カ月－7歳（乳幼児－小1）　日本人小学校 9－13歳（小3－中1） 現地校	7年 4年6カ月 計11年6カ月
C	英　国 （ロンドン）	6－12歳（幼－小6） 現地小学校	6年
D	①英　国 （ロンドン） ②シンガポール ③英　国 （ロンドン）	0－6歳（誕生－幼） 6－10歳（幼－小3） 日本人小学校 10－11歳7ケ月（小3－小5）　現地小学校	6年 4年 1年7ケ月 計11年7ケ月
E	オーストラリア （シドニー）	8－12歳（小3－小5） 聖心インターナショナル	4年
F	米　国 （ニューヨーク シティ）	7－11歳 （小1－小6）**　* ** 日本…聖心インターナショナル * アメリカ…私立小学校 1年とび級して小6	4年

より帰国。Aさんは，翌1940（昭和15）年に帰国している。日米開戦の前年で，「両国間の国交が次第に険悪になりつつあったので，父は家族だけを先に帰国させ，翌年最後の交換船で帰国した。」と云う。

5）調査対象者が別科に在学した時代

調査対象者６名が別科に在学した時代は，1937（昭和12）年から1942（昭和17）年であり，女学校を卒業した年は1944（昭和19）年３月から1947（昭和23）年３月までである。

この時代は1937（昭和12）年に日中戦争が始まり，1939（昭和14）年には，ヨーロッパで第二次世界大戦が勃発し，1941（昭和16）年12月，日本は米英仏等に宣戦布告し，太平洋戦争に突入。カナダも敵国となった。年々戦争が拡大して，日本はきびしい軍時態勢へと変って行った。1945（昭和20）年には，日本全土が，連日空襲にさらされ，全都が焼野原となった東京大空襲，広島・長崎への原爆投下により，日本は敗戦。調査対象者の別科在学時は，まさに戦争の時代であった。1940（昭和15）年には，時局は極端な軍国主義化の風潮であり，ミッションスクールである東洋英和の教育や，自由な雰囲気は白眼視されつつあった。東洋英和では，この年，ハミルトン校長に代って，日本人が初めて校長になった。また，東洋英和の英は，敵国，鬼畜米英の英で面白くない，と云う文部省筋の示唆で1941（昭和16）年に，校名を東洋永和女学校と変えている。

日米間の外交が一触即発の危機にあった1941（昭和16）年に，外国人教師の引揚げが始まった。翌17年には，在日宣教師は抑留所に強制収容され，ハミルトンも敵国人として，同年７月交換船で帰国した。国粋主義の教員もふえ，校内の自由主義的なものは，すべて清算するという動きが出て来ていた。しかし，1943（昭和18）年12月24日にクリスマス礼拝がまだ挙行されていたし，「別科」も1944（昭和19）年３月まで存置されていた。宗教教育，英語教育，帰国子女教育を東洋英和の教育の特色と位置づけてこれを重視し，戦時下であっても，この伝統を守り続けたことが，次の記録からも知ることができる。「８時半から決戦下にふさわしい簡単なクリスマスを厳しゅくに守りました。」（『クラス日誌』昭和18年12月24日高等女学科第４学年２組）[3]
また，脇山校長は1942年の新学期に当り，全校合同職員会議で次のような訓示をした。「（前略）3.宗教教育，英語教育の特色を十分生かしたい。英語は日本思想を外国人に解らせるための英語である。（以下略）」（『教員会

議録』昭和17年４月10日）[3]

(2) 帰国後の学校生活

箕浦（1984）は，帰国時の年齢が適応にどう影響を及ぼすかについて「対人文化文法の最も重要な時期は９～15歳までの６年間」[4]とし　この自己形成臨界期の大部分を異文化で育ち，14～15歳で帰国した子供は，新しい文化型への行動の切りかえが困難で，帰国ショックが大きいが，文化的自己が確立していない段階の９～11歳で，帰国した場合は心理的困難をあまり感ぜずに，新しい文化型への切り換えができる。と説明しているが，この説にもとづき，帰国年齢13歳以上を（グループⅠ），12歳以下を（グループⅡ）とし，インタビュー事例に示して考察する。

1）学習面，生活環境面での適応

①　別科での学習は，国語（日本語）の学力をつける事を中心に行われたようである。調査対象者は日本の小学校に全く行っていないか，行っても低学年の２～３年であり，その後に４年から６年間の外国生活が続いているので，日本語力は非常に低い人が多い。それを，２～３年間で年齢相当学年に編入できるまでに力をつける勉強は，かなり厳しく，特に年齢の高い人は，ブランク期間が大きいだけに，回復には大変な努力を必要としたようである。

グループⅠのＡさんの例

「家が横浜にあり，２時間かけての通学に，睡眠時間をへらして，必死に勉強しました。若い人はすぐ追いついて日本語を話すようになるのですが。また，始めは数学など，計算は出来ても，文章題は意味が解らないので出来ないのです。」

グループⅠのＢさんの例

「一生涯に，この別科での２年７カ月程，勉強した事はありませんでした。とにかく，小３から女学校３年までの７年分の勉強をしたのです。厳しい先生でした。教室では英語は禁止で，日本語しか使ってはいけないと言われました。後では，そのおかげであそこまで力がついたのだと思えるようになりましたが。」

グループⅡのCさんの例

「英国にいた時，家では両親とは日本語で話をしてましたが，読み書きは全くしてなくて，漢字，熟語など難しくて大変でした。帰国当初は電車の駅名が読めなくて迷児になった事があります。お習字は未だに泣かされていますね。結婚式の時なんか。」

② 「別科」での生活環境面について，次の三例に共通していることは，色んな国から帰って来た子供達が夫々の滞在した国の自慢をして，喧嘩したこと。その時，二世のお姉さん達が仲裁してくれたことである。二世達のもつ雰囲気が，「別科」を明るく楽しいものにしていたようである。

グループⅡのDさんの例

「私は英国生れで，自分を英国人と思っていて，日本人意識がなく，日本へ行くのを厭がっていたが，別科の新らしい環境に入って，すぐ友人が出来，嬉しかった。小学生の間で，米国英語と英国英語で，もめたりした。二世の年長の方々がいて，かわいがって下さって，楽しかった。お転婆で廊下を走ったりしてたので，順番でやる級長役をはずされたのが口惜しかった。」

グループⅡのFさんの例

「ハワイやロスの日系人上流社会の二世で，日本語を身につけるための留学生が別科にはいらして，もう大人のレディが同級生でいた。帰国生はフランクすぎて，自己主張が強いし，滞在していた夫々の国を，自分の気持で自慢する。そんな事で喧嘩すると，二世のお姉さん達が仲裁して下さる。英語でしゃべって，ネーと日本語がつくの。秋山先生は，外国に行っていないのに，英語がすごく上手で，英語で叱る。二世の大きい人達も，先生を尊敬して従っていた。秋山先生は公平で，皆の前で，ほめたり，叱ったり，励ましたりして下さる。はっきりしていて，皆もウエットではないから，気持がぴったり合っていた。別科は明るく，刺激のある，活気のある楽しいクラスでした。インターナショナルスクールは英国風で暗い感じだった。それに女学科に受入

れてくれると云う希望があって，安心もあった。（皆が）それに向って励んでいた。」

グループⅡのＥさんの例

「別科には年長の二世の方々がいて，その方達は大抵，寮にいらした。私も一時，寮に入った事があったが，かわいがって下さった。寮の規則はきびしかったが，設備が整い，人間関係がよく，いい思い出ばかり。」

制服は着ていても目立つ存在であった二世達のいる別科への風当りについて，以上の三例では特にふれられていない。「女学科へ受けいれてくれると云う希望があって，また安心もあって」秋山先生の指導のもとに勉強に励んだ別科時代を，楽しい活気のあるよい時代として回顧しているが，これに対して，次の二例は，かなりのプレッシャーを感じ，適応に苦しみ，悩んでいる。二例ともグループＩに属しており成長期の大部分を異文化に育ち，女学生の年齢で帰国した人達である。学力回復についても，環境面の適応についても，箕浦の臨界期（1984）説を裏づけるような結果がみられる。

グループＩのＡさんの例

「年齢も，行っていた国も，ヨーロッパ系統，ハワイ・アメリカ等ちがう人達だが，国語が出来ない，漢字が書けない，敬語の使い方がわからない等では，皆同じような仲間が，別科の中では，お互いに肩をよせ合って，外からのプレッシャーに耐え，過していたという感じです。別科の中は，いい雰囲気なんです。でも＜アメリカ人みたいだ。日本人じゃない。＞等と云われると，皆涙を流してくやしがった。

学力回復以上に苦労したのは，日本式の考え方，生活様式，態度，感覚になれない事でした。例えば，国内生は，先生にさされて出来なかった時など＜よくさらって来ませんでした。ごめんなさい。＞と云うが別科生は＜習ってないから，出来ません。＞と云う。こちらでは，こう云う事を云ったら，相手の疳にさわると云うような事がわからない。日本は住み難いと感じました。」

グループⅠのBさんの例

「国全体が一方向を向いていた，戦時態勢の中で，別科の私達は何か異質な浮いた存在だったと思います。」

③　能力別指導や編入学年について

別科の中では，徹底した能力別グループ指導が行われていたし，女学科編入の際に，相当学年に編入できる生徒は少く，１年下か，２年下の学年に編入または入学している。

グループⅠのBさんの例

「別科の中では，ひとりひとりの個人差のある事が，お互いによくわかります。A，B能力別クラスに分れても，１年下や２年下の学年の編入でも，秋山先生がきめて下さることで，お互いのことは知らなかったし，たとえ知っても，アメリカでは，とび級も，能力別クラスも普通のことです。」

「帰国生徒の親も含めての特性ではないかと思うことに，能力別指導を気にしないことがある」[4)]と（お茶の水女子大学付属小学校帰国子女学級の担当教師生駒正美教諭，1983）[4)]は語っている。日本では，能力別グループ分けを問題視し，抵抗が多くてなかなか実施し難い由である。

④　普通クラス編入後の学校生活について

適応に全く困難を感じなかったCさんの例と，適応に苦しんだBさんの例を次に示す。

グループⅡのCさんの例

「別科に２年半いて，女学科２年に編入した。１年下の学年に入ったのだけれど，同じ別科の仲間３人と一緒に入ったので，すぐとけこめた。同じ小学科にいるからクラスの様子がよくわかる。１学年下のクラスの方が，おとなしい人が多いので，そっちへ入りたいと話し合っていたのです。低学年ですから，勉強の方も，それ程難しくなかった。」

グループⅠのBさんの例

「１年もおくれずに，４年に編入したものの，ぬけている学科が多く，それはわからない部分が多いままでした。特にお裁縫では，それ迄一切縫ったことがないし，皆は羽織を縫っているというのに，襟先とか，おくみとかの名称もわからないのですから，どうにもなりません。別科では，ただひたすら追いつく為の勉強に励み，勉強の方は追いついても，心の面では追いつけなくて，色々なとまどいがありました。女学科４年では，それぞれ友人グループが出来上っていて，どのグループにも入れず，積極的に友人になってくれる人もなく，嫌われているのかしらと，とても心細く淋しい思いをしました。アメリカでは，外国から来た子供に対して，先生も子供達も，ちょっとたじたじする位積極的に，向うの方から親切に面倒見て下さいますが，日本では，すべてが控え目で必要以上に手を出さない。そう云う所は，とても冷たく思えます。編入後間もなくあった修学旅行で，お土産を買う自由時間に，一人ポツンとしていた悲しい思い出があります。５年生になって，同じ女子大英文科を受ける人達と，受験勉強の段階でグループができ，友人もできて落ちつきました。卒業後も親しくしている友達に＜貴女は随分早く私達の中にとけこんでいらっしゃったわね＞と云われて私の方がびっくりしました。私にとっては，友達ができる迄，随分時間がかかった様に思えたからです。」

ＣさんとＢさんは，殆んど同時期に別科に在学している。前者は相当学年より１学年下に，仲間３人と共に入ったが，後者は年齢相当学年の４年にとび級で編入した為，学習面での余裕もなく，友人が出来て落ちつくまでの一年間，日本人の考え方，感情表現の仕方がわからず，独り相撲をして，悩んでいたこと，心の適応が難しかったことを挙げている。女学校に編入した後の適応に苦しんだと話したのは，Ｂさんだけである。

２）言語について

①　海外在住時の日本語の修得

グループⅡのＦさんの例

「両親とは日本語で話して，妹とは英語で話したり喧嘩したりした。母から二人とも，日本語の書取りを習っていましたので，別科に入った時，楽でした。」

大体は両親と日本語で話して居るが，例外的なのが次のＤさんの例である。

② 英語の修得と維持

グループⅡのＤさんの例

「私の母は英和の卒業生で，英語をよく話し，英国にいた時，（私は）家庭でも両親と英語で話しました。母は戦争中でも，私と英語で話しました。」

グループⅡのＣさんの例（グループⅠのＡ，Ｂさんも，同様の話をした。）

「別科の時，友達同志は授業以外は，会話は全部英語でした。友達同志で英語の本の貸借をして読んでいました。この事が英語維持に役立ったと思います。」

グループⅡのＣさんの例

「帰国後も英国から手紙がずっと来ていました。開封され，検閲の印がおしてある手紙でした。戦後，1946年から小学校の先生や友人との文通が復活し，今も続いています。」

グループⅡのＦさんの例（グループⅠのＢさん，グループⅡのＥさんも同様の話をした）

「女学科では，５年生の時，英語の時間が１日２時間の日が２日，他は１時間で，週７時間ありました。Ａ，Ｂのグレイド別になっていて，私達（Ａクラス）は，ライブラリーで本を読んでよい時間があったり，特別の授業がありました。その時は，レベルの高い英語で，詩やシェクスピア等，はじめはミス・ハミルトンの指導でやりました。又，英語劇もやりました。英語は，ばっちりやりました。」

英語が敵性外国語という時代で，公立女学校では英語の時間は週３時間位，それも更に縮少廃止へと向っていた時，充実した英語教育が行われていたのを知る事ができる。

(3) 異文化体験の影響について

半世紀後の今日，かつての異文化体験や，別科での自文化復帰体験が，その後の生き方に，或は性格形成に，何らかの影響があったかをインタビューでたづねた。性格への影響については，異文化体験により形成された自立性，発言や行動の積極性，社交性や客観性を肯定し，国内育ちの人達と比較して，それを高く自己評価している向きがうかがわれる。

グループⅠのAさんの例

「誰かと一緒でなければ何も出来ないと云うのではなく，独りで海外旅行も出来るし，自分の考えや意見をはっきり言うところがあります。」

グループⅠのBさんの例

「非常に明るくて，社交的，交際が広く，友人が多いのは，アメリカの体験から。また，別科での勉強をやり抜いたことで，その後の生き方の上に自信のようなものが残った。我慢強く努力することも出来るようになった。」

グループⅡのCさんの例

「よく，人から，可愛い気がないとか，甘えが少いなどと云われる。日本育ちの人には，感情的な人が多いような気がする。例えば，感情的に嫌いな人だと長所があっても，それを認めようとしないが，私はもっと客観的に，冷静に見ようとする。」

また，自文化復帰体験の影響が，やや否定的に関っているのが次の二例である。

グループⅠのAさんの例

「母親は私が＜アメリカ人になったら困る＞とアメリカにいる時から心配していました。16歳で帰国してから，別科というクッションがあったにも抱わらず，日本的な思考，習慣，行動様式に慣れることが出来ず，長い間苦労しました。自分の経験から，子供二人は大学までは日本で教育しようと思い，そうしました。」

グループⅠのBさんの例

「結婚相手は，海外赴任しないでもいい人を，と思いました。」

次の例は，異文化体験を肯定し，その文化，生活，友人との交流を大切にしている。

グループⅡのCさんの例

「戦後，1946（昭和21）年から，英国の小学校時代の先生や友人との文通がずーっと続いていた。英国人は親しくなるのに，一寸時間がかかるが，友人になると長続きすると思う。1964（昭和39）年に24年ぶりに英国に行って，先生や友人を訪ねた。以来時々英国に帰る。ロンドン郊外の友人宅をあちこち訪問し，旧交をあたためて，二週間程滞在する。英国行は私にとってセンチメンタル・ジャーニイといった感じなの。」

(4) 考　　察

この調査はサンプル数も少く，第二次世界大戦時という「時代」を反映した質的なものであり，一般化することは出来ないが，調査対象者を，次の観点から，考察を試みる。

(i) 別科在学年度を，a：S12～S14，b：S14～S16，c：S15～S17にわける。（「昭和」をSと略記，「年度」は数字のみで示す。）

(ii) 帰国年齢を，グループⅠ（13歳以上），グループⅡ（12歳以下）にわける。

調査対象者6人のうち，グループⅡでaに属する，つまり，戦争前に別科に入ったEさん，Fさん，海外滞在が4年間と短い故もあり，学力の回復も早く，2年間の別科での学習後，相当年齢より1年下の学年ではあるが，女学校1年に編入でなく，入学している。別科時代は「活気にみち，楽しく明るい」時であったと云う。女学校5年間も充実した教育をうけている。グループⅡでbに属するCさん，Dさんは，海外滞在期間が6年，11年7カ月と長く，2年半の別科での学習後，年齢相当より1学年下の女学科2年に編入した。別科時代はaの二人と同じく，明るく楽しいクラスで，学習に励んだ。

女学校編入後の学校生活もスムーズに順応したが，戦争のため，充実した教育は受けられなかった。グループⅠでbに属するBさんは，海外滞在は，11年6カ月と長く，別科時代は「生涯でこれ程勉強した事はなかった」2年7カ月であった。その学力，努力，健康，年齢の総合評価により，年齢相当の女学科4年に編入する。女学科3年迄の履習してない学科も多く，学習面でも余裕がなく，一年間は友人も得られず，孤独感に悩む。グループⅠでcに属するAさんは，海外滞在は，10年間，16歳で，殆んど，アメリカ人としての帰属意識をもって別科に入り，別科時代に「学力の回復以上に，日本的な思考，習慣，行動様式に慣れることが出来ず」それが長く続いたと言っている。2年半の別科時代の後，年齢相当より2年下の4年に編入した。カナダ人の教師も多く，教育様式もカナダ式がとり入れられ，自由な校風の学校であったが，この戦時態勢下では学校自体の存立も，危機的状況で，伝統の自由教育が困難になって来て居り，Aさん，Bさんの復帰ショックを強くしたと思われる。

調査対象者6名は，筆者の「別科」の調査に対して，非常に好意的に応じてくれた。現在，母校に「別科」が設置されてないことを残念がり，40数年を経た現在，全員が「別科」の教育を高く評価しており，また，それぞれの異文化体験の人格形成や語学力や価値感への影響を，肯定的に評価していることがうかがわれた。

Ⅳ　おわりに

「別科」のシステムを調べ　その教育実践を見る時，自由で弾力的な教育様式に驚かされる。「別科」のおかれた東洋英和女学院はカナダ系のミッションスクールで，カナダ人宣教師が校長の学校で，カナダの教育様式が多分にとりいれられている。別科組織の概要は，①学力を問わず，随時受入れ，②帰国児童（10歳）から，留学生（18歳）までの混合クラス，③小学校に設置され，この段階からの学力回復をはかった，④2～3年間の学力回復期間の後，個々の生徒の実態に応じ，学力相当の学年へのスムーズな編入（とび

級もあれば，下の学年に入る事もある）。⑤定員20名の少数クラス，⑥能力別グループにわけ，更に独り，独りの個人指導。英米の教育様式とよく似ているが，現在の日本の学校制度の中では，とても実施困難だと思われるシステムである。何故困難かを考える時，日本の教育行政による，学年制をはじめ，教育内容や教育方法の規制が多いことや，受験体制を基礎にもつ，淘汰的な教育文化の特殊性が見えてくる。日本の学校教育は「教育の機能を果しているのではなく，選抜としての機能を果している。」[6]（中西1985）と言われるが，入試の為の効率のよい大規模クラスの一斉授業が，日本の授業の型である。帰国児童生徒の海外での滞在国は世界各国にわたっている。そのそれぞれの国の文化を反映した，多様な授業の型で学んで来た帰国生，特に欧米の自由な個人指導の授業の型で学んで来た子ども達は，日本独特の授業の型に戸惑い，まず，様式からつまづく者が多い。現在の受入れ学級では，欧米式の個人指導型のグレイド別の小人数クラス，更に小さなグループでの個人指導を行い，個々の学力を高める教育をし，一方では日本の一斉授業に慣れさせるために一部教科を普通クラスへ混入し，次第に混入教科をふやして行く等，さまざまの試行がされているのが現状である。

多くの受入れ学級では，第一年次には，「別科」のような帰国生徒だけの独立学級，二年次には一部普通学級に混入，三年次には全部混入方式という工合に段階的に適応を進めている。研究校で実験的に行われている受入れ学級を，普通校に設置拡大する際に，帰国生徒の異文化体験を生かしのばす為に，異質な文化に対して寛容な教育環境がつくられるような教育改革が望まれる。これは日本の教育を見直すよい機会であると思われる。

「別科」の教育実践で特に注目されるのは，担任教師の優れた指導力と，弾力的なカリキュラムの設定運営，編入の決定等すべて任されている事である。教師が自由に，その能力を発揮できる，教育環境が大切だと思われる。

受入れ体制の整備の一つとして，教員養成の問題がある。「帰国子女教育」について，教師の意識をかえ，異文化間教育への理解を深めるための再教育を行うことである。国内・国外研修の機会を与え，教職課程の教科に

「バイリンガル教育方法」とか，「異文化間教育」，「国際教育」等を加え，教師養成を行う事を提案したい。帰国児童生徒の教育は，日本の学校教育への変革を促がすものである。「別科」の調査は，この問題を考える上の一つの資料として，提供したものである。

注

【引用・参考文献】

1）東洋英和女学院史料室委員会（1981）「秋山はる先生の話」『別科－海外帰国子女の教育』史料室だよりNo.14 』

2）井上健之助編（1954）「東洋英和女学院七十年誌」『別科』P 108～109

3）東洋英和女学院百年史編纂実行委員会編（1984）「東洋英和女学院百年史」『別科』P 250～251，及び『ハミルトン校長時代の始まり』P26，P 228～229，『戦時下の東洋英和』P 346～348

4）都立教育研究所編（1983）「特集－帰国子女の教育＜実践事例－1. わが校の帰国子女教育＞」『教育じほう1』P17～73，引用P46

5）箕浦康子（1984）「子供の異文化体験－人格形成の過程の心理人類学的研究－」思索社　P 254，P 279

6）中西　晃他（1985）「今後のバイリンガル・バイカルチュラル教育のために」『バイリンガル・バイカルチュラル教育の現状と課題－在外・帰国子女教育を中心として－』東京学芸大学海外子女教育センター　P 129

7）ニエカワ・アグネス（1985）「成人したかつての帰国子女の過去再検討」『バイリンガル・バイカルチュラル教育の現状と課題－在学帰国子女教育を中心として－』東京学芸大学海外子女教育センター　P 181～242

8）小野田エリ子（1988）「異文化体験者としての『帰国子女』－追跡面接調査より－」『異文化間教育２』アカデミア出版　P56～98
9）星野命（1988）「転校生の問題－帰国児童生徒を中心に－」『教育と医学』第36巻第４号，慶応通信　P48～58
10）東洋英和女学院小学科校内誌（1939）「小羊」第５号
11）山本順子（1987）「帰国直後における帰国子女の実態について－慶応義塾大学帰国子女研修課程のケースから－」『慶応義塾女子高等学校研究紀要』第４号　P49～62

付　記

本研究は，国際基督教大学教育研究所見習研究員として，同研究所において研修した成果の一部の報告である。

筆者が長年，中高部理科教諭として勤務した東洋英和女学院の歴史的教育実践の一つを，一部であるが，ここに報告できる事を幸いと思っている。

教育研究所に入るに際して保証人として推薦戴いた，三宅彰教授，アドバイザーとして終始御指導を戴き，本稿の執筆にあたって，数々の御助言を賜った星野命教授をはじめとし，研修に当って，特に心理学研究法履修に際して種々御指導いただいた原一雄教授，小谷英文助教授，栗山容子助教授，の諸先生方に記して感謝申し上げる。

また，本調査に当り，インタビューに応じて下さり，資料提供いただいた，元「別科生」の方々に心からの感謝の意を表したい。

名簿を提供いただいたにも抱わらず，時間的制約のため，今回は活用出来なかったが，この研究は　異文化体験者である別科生の軌跡をたずねて，調査を続けるつもりであるので，今後十分に活用したい。

A STUDY ON SPECIAL CLASS FOR EDUCATION OF THE RETURNED CHILDREN FROM OVERSEAS AT TOYO EIWA GIRL'S SCHOOL DURING THE WORLD WAR II

(English Résumé)

Kazuko Hara

Summary

"The Special Class" was established in the elementary level of Toyo Eiwa Girl's School (Canadian Mission School) in 1934 and existed until 1944, at the beginning era of the World War II. It was to accept the returned Japanese-Canadian and Japanese-American children.

The purpose of this study is to research the system and educational practices of "the Special Class" and to promote the discussion into the education of the returned children nowadays.

The methods were (1) to review the historical resources of the interview materials of Haru Akiyama who had taught the special class for ten years to overlook the establishment, system and practice of the special class, and (2) to interview the six returned children who belonged to the special class from 1937 to 1942, the year the World War II started to illustrate their school life in the special class and to research the effects of intercultural experiences on their study proficiencies and adaptation to the new environment or their own cultural settings.

The results are summarized as follows.

(1) The systems of the special class were that (a) no entrance examination on their study abilities was practiced, (b) the students were from ten to eighteen years old and the class had very distinct communication orientation, (c) Japanese language (from first grade level) was taught, (d) small

class size (20 students) with various levels based on each student's study skill was maintained, (e) after one to three years of schooling, the students were able to advance or transfer to their own grade level with no examination.

Thus, the special class had free system like Canadian educational system and very thorough language education system.

(2) Two cases of the students who returned to Japan at the age of over thirteen years old and belonged to the special class during the World War II revealed that they experienced much difficulties on their recovery of study level and adaptation to the cultural changes. However, those who returned at the age of under twelve did not show such difficulties. Also, the timing of returning (either before or after the war had started) seemed to have no significant effects. The positive reactions on the effects of intercultural experiences on personality and language abilities were obtained in all of the cases.